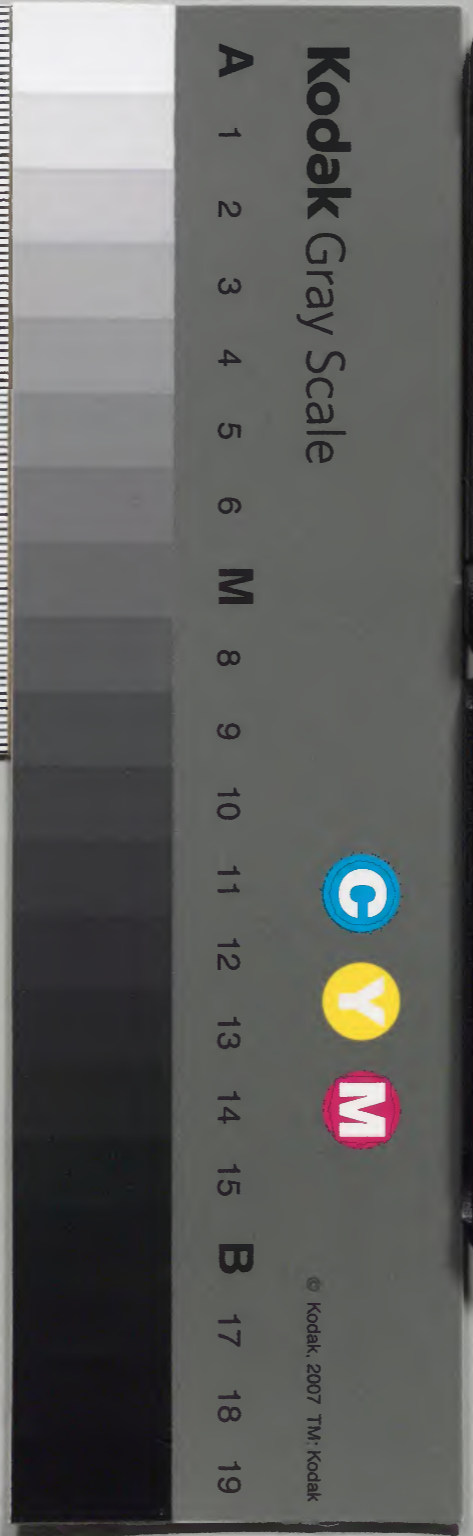


和書門
五三冊

和書門		一七六八九號	類
五三冊	五架	一七八函	

庫文閣内		和書
三函	二架	一七六八九號
二架	三冊	五三冊

内閣文庫	
番號	和 17685
冊數	53 (3)
函號	202 350



久
十
六
載

其此通六階初意功之次為訪大木式乳母達則

其若倫家倫等

其若倫家倫等

其若倫家倫等

其若倫家倫等

其若倫家倫等

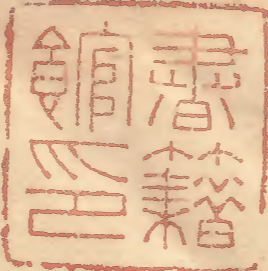
其若倫家倫等

其若倫家倫等

其若倫家倫等

其若倫家倫等

其若倫家倫等



夕顏
十

六歲

淺草文庫

和學講談所

妻比通六條御息所之次為訪大大式乳母違例
尋五條家給事

今年御息所二十四秋
好中宮八歲成給也

同時見行夕顏宿給事

使隨身折花之次主人女出扇令置花事

其扇畫歌則又源氏遣返哥事

其夜六條御息所給事

惟光參之以問夕顏案內給事

伊与寺上浴之事

源氏又宿六條給事

翌朝与女房中將君戲給事

侍童折桂猷之事
惟光夕顏宿垣間見事

同人候共事

八月十五夜留夕顏宿与女房同車向河奈院事

同十六夜夕顏与烏毛所厭鬼頓滅事

九年十月

奉移夕魚君於東山邊事

右近君同乘事

源氏觸穢笔落二條院事

同十八日夜源氏向東山見夕魚君死骸給事

歸京之特於河奈埜落馬之事

右近君參候二條院事

九月末右近君物語之次始而和夕顏君之始終

給事

空蟬君奉消息於源氏則遣返哥夏

戴人少將通兩御方事

源贈軒端萩哥事

夕魚上四十九日佛事於比叡法花堂修之事

文章博士作額文事

四十九日崇十月五日也

十月朔日伊予守伴空蟬君下國事

源氏錢贈櫛扇事

又遣遣薄衣事

一、東山、北山、南の、
 以六條所息所 秋将中宮母後 前坊所息所
 中將所息所 貞信女 前坊所息所
 秋宮女御母 又臣女 以下同也
 伊豆の、
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

家下... 上... 弟...

●大臣 六條御息所 前坊御息所 秋好中宮母 兼前坊桐 重宗門才 源氏御 叔又介

●自信公 中將御息所 貴子 前坊保明親王之御息所 保明者 文彦 太子也 後鳥重明親王北方此例

●醍醐帝 保明親王 前坊諡号 文彦太子 度賴王 存宮女御 太子 徽子

桐臺帝 光祿氏 前坊 秋好中宮 母六條御息所 大臣女也

桃園式部卿宮 權存院 三宮 兩政 北方

心也... 西... 前坊... 在喜... 私... 或... 乃...

不説のうろの

以 伊良ハハウウク 唯先 乳母截 貞令有部

毗奈那目各師子胤其父以兒授以乳母

卒嚴姓云檀波羅密為乳尸羅波羅密為乳母

又字集名云彌弁也平成云乳母

乳人母也 傳或母

唐武云皇子皇孫 乳母 和名 如能度

史記傳云武帝少時東武候母掌養帝今壯時号之

曰大乳母

日本紀下 神代云天孫取婦人為乳母湯母及飲壽湯

坐美

凡諸神部偷行以奉養焉于時推用他婦以乳養皇

子為世取乳母養兒之縁也

對云今云云 乳親王子者皆給乳母 諸若内親王嫁諸王

雜王三人子二人所養子年十三以上至乳母身死

更不得立替

古今集作者紀乳母 陽成院御乳母 大江高綱

花 伊良ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

新王ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

あまウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

不説のウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

奏ウウウウウウ

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

小宮
いふりちりすも

いふりちりすも
いふりちりすも

いふりちりすも
いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

いふりちりすも

身より後ろなり

其書 具らううくんとゆりゆきん

又ういあううううううううう

あううう

うううう

井 上りううううううううう

中りきき

日一劫 ううううううううう

ゆきううううううううう

あ 上りううううううううう

うううう二階 上りううう

中りううううううううう

ううううううううう

細代車 上りううううう

九車 上りううううう

又袖 上りううううう

細代車 上りううううう

上りううううううう

封てうれううううう

ううううううううう

ううううううううう

ううううううううう

ううううううううう

ううううううううう

ううううううううう

ううううううううう

ううううううううう

如 馬のいふが如く 二井河のいふが如く 遠近書

詩 心は驚き河白雲 獨跨 歎 段遠 湖行

非 云々云々云々云々云々云々云々

師 人の心は 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

諸織戸

ソウ...

奥石 奥入 世の中...

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

予を以て... 禁王、臺上夜、琴声... 傳事... 予の不言... 事... 予... 予...

予... 松... 予... 予...

事...

松葉... 傳事...

予... 予...

予... 予...

予...

予...

予...

予...

予...

予...

きりぎりす物

（抄）

（抄）

きりぎりす物

（抄）

きりぎりす物

（抄）

（抄）

きりぎりす物

（抄）

きりぎりす物

（抄）

きりぎりす物

（抄）

きりぎりす物

きりぎりす物

（抄）

きりぎりす物

（抄）

きりぎりす物

（抄）

（抄）

きりぎりす物

（抄）

きりぎりす物

（抄）

（抄）

きりぎりす物

宗廟の神は天子の祖神にして天子の宗廟に奉りて祀るる也
天子の宗廟に奉りて祀るる也

天子の宗廟に奉りて祀るる也

天子の宗廟に奉りて祀るる也

天子の宗廟に奉りて祀るる也

天子の宗廟に奉りて祀るる也

天子の宗廟に奉りて祀るる也

天子の宗廟に奉りて祀るる也

天子の宗廟に奉りて祀るる也

天子の宗廟に奉りて祀るる也

天子の宗廟に奉りて祀るる也

天子の宗廟に奉りて祀るる也

天子の宗廟に奉りて祀るる也

天子の宗廟に奉りて祀るる也

天子の宗廟に奉りて祀るる也

行跡もろくもろく...
まじりたる...
まじりたる...

いづれ...
いづれ...
いづれ...

今や世より...
今や世より...
今や世より...

文白 文ヲイハトヨナリ
毛詩云声成文

古報云...
古報云...
古報云...

信挿...
信挿...
信挿...

古籍...
古籍...
古籍...

とある...
とある...
とある...

類注...
類注...
類注...

海内...
海内...
海内...

細...
細...
細...

又...
又...
又...

下...
下...
下...

古...
古...
古...

今...
今...
今...

可也ねえりりしはさるる海平は
 主なるは惟之新入のしはるる
 川にまゝに 山にまゝにまゝに
 昔より 山にまゝにまゝに
 惟之新入のしはるる

以 供養 安惠内奉行 慈覺木師御弟子 始補河内署梨

松云河内署梨梵語也翻無煩惱

山河内署梨 惟光元也

惟光

少將令瑞

参河守書

山河内署梨 惟光元也
 少將令瑞 参河守書
 山河内署梨 惟光元也
 少將令瑞 参河守書

山河内署梨 惟光元也

山河内署梨 惟光元也

山河内署梨 惟光元也

山河内署梨 惟光元也

山河内署梨 惟光元也

山河内署梨 惟光元也

山河内署梨 惟光元也

山河内署梨 惟光元也

山河内署梨 惟光元也

山河内署梨 惟光元也

如諸佛不著華鬘璪珠及香塗身葉一日一夜

如諸佛不自歌舞及故作觀下一日一夜自歌舞

及故作觀舞戒

可蘇生也 又活也

今之人多不守此戒

今之人多不守此戒

今之人多不守此戒

今之人多不守此戒

今之人多不守此戒

今之人多不守此戒

今之人多不守此戒

今之人多不守此戒

今之人多不守此戒

今之人多不守此戒

今之人多不守此戒

今之人多不守此戒

今之人多不守此戒

今之人多不守此戒

今之人多不守此戒

今之人多不守此戒

今之人多不守此戒

以行勝

殺生戒

如諸佛不殺生一日一夜不殺生

戒能持否

偷盜戒

如諸佛不偷盜一日一夜不偷盜

戒能持否

邪淫戒

同

享誥戒

同

飲酒戒

如諸佛不坐高大床一日一夜不坐高大床

能持否

新進のりきりていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと

いふにウツルもよし

か しの地味もあつて 攀ぐ 雲同之

うさあうさいふもよし

ま ぼんぼんは梅すうり 細うとあふり

つうく 尖る白まを 踏すあゆ

あふりあふり

あふりあふり ぼんぼん ぼんぼん

あふりあふり

いふにウツル

うさあうさ しの地味もあつて 攀ぐ 雲同之

あふりあふり

あふりあふり

あふりあふり しの地味もあつて 攀ぐ 雲同之

あふりあふり しの地味もあつて 攀ぐ 雲同之

あふりあふり しの地味もあつて 攀ぐ 雲同之

あふりあふり しの地味もあつて 攀ぐ 雲同之

あふりあふり

あふりあふり しの地味もあつて 攀ぐ 雲同之

あふりあふり

あふりあふり しの地味もあつて 攀ぐ 雲同之

あふりあふり

あふりあふり しの地味もあつて 攀ぐ 雲同之

あふりあふり しの地味もあつて 攀ぐ 雲同之

あふりあふり しの地味もあつて 攀ぐ 雲同之

あふりあふり しの地味もあつて 攀ぐ 雲同之

あふりあふり

たつたふと母の口へ

きりかきし あり少とくくくく

きりかきし

たつたふと

かきりし あり少とくくく

きりかきし あり少とくくく

きりかきし

かきりし あり少とくくく

きりかきし

かきりし あり少とくくく

かきりし あり少とくくく

かきりし あり少とくくく

かきりし あり少とくくく

きりかきし あり少とくくく

きりかきし あり少とくくく

きりかきし あり少とくくく

きりかきし あり少とくくく

きりかきし あり少とくくく

きりかきし あり少とくくく

きりかきし あり少とくくく

きりかきし あり少とくくく

きりかきし あり少とくくく

きりかきし あり少とくくく

きりかきし あり少とくくく

きりかきし あり少とくくく

きりかきし あり少とくくく

いふ部と吾人と物とて事ありあはれし
毛詩如甄序とてふは吾人今世の事とて
序あり吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の

事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の

事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の

事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の

天文十二年六月十日
西雲寺夜話之時
抄心正
事方

事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の

事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の

事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の

事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の

事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の
事とてふは吾人今世の事とてふは吾人今世の

室方之世ニあり命 己ノ故中極ニあり

あそとろりり 妙テテ娘姘日紀日

あそとろりり 事其日其人ありていり中日

あそとろりり 事其日其人ありていり中日

あそとろりり 事其日其人ありていり中日

あそとろりり 事其日其人ありていり中日

あそとろりり 事其日其人ありていり中日

あそとろりり 事其日其人ありていり中日

あそとろりり 事其日其人ありていり中日

あそとろりり 事其日其人ありていり中日

あそとろりり 事其日其人ありていり中日

あそとろりり 事其日其人ありていり中日

あそとろりり 事其日其人ありていり中日

人々もやがてとていふ事なれば
うらぐしは事なりとていふ事なれば
うらぐしは事なりとていふ事なれば

松 舟より言はれし事なれば
舟より言はれし事なれば
舟より言はれし事なれば

舟より言はれし事なれば
舟より言はれし事なれば
舟より言はれし事なれば

舟より言はれし事なれば
舟より言はれし事なれば
舟より言はれし事なれば

舟より言はれし事なれば
舟より言はれし事なれば
舟より言はれし事なれば

舟より言はれし事なれば
舟より言はれし事なれば
舟より言はれし事なれば

舟より言はれし事なれば
舟より言はれし事なれば
舟より言はれし事なれば

舟より言はれし事なれば
舟より言はれし事なれば
舟より言はれし事なれば

小女は海にゆくわらわりのうらまへをたづねてくわわく
しねるよつかりよ

おまふり用し ちかてしねるまを不用く
あまそむいもくまをちねるまをくわわく
しねるまをくまをくわわく

下るるにほろひのけりてきりて
そわくもえあひんうらまへく 上るるりり日ま可
もくまをくまをく

又ねるまをくまをく 又ねるまをく
何れまをくまをく 又ねるまをく
あひんうらまへ

多るまをくまをく 又ねるまをく
あひんうらまへ 又ねるまをく
す ねるまをく 又ねるまをく

あひんうらまへ 又ねるまをく
あひんうらまへ 又ねるまをく
あひんうらまへ 又ねるまをく

あひんうらまへ 又ねるまをく
あひんうらまへ 又ねるまをく
あひんうらまへ 又ねるまをく

あひんうらまへ 又ねるまをく
あひんうらまへ 又ねるまをく
あひんうらまへ 又ねるまをく

あひんうらまへ 又ねるまをく
あひんうらまへ 又ねるまをく
あひんうらまへ 又ねるまをく

り又の事なり口をふらへて其年より
大いなる事なり又其の中よりとらへつた奴等
言ふに其の人の名をいふに河内守と云ふ事
ありしに其の事なりと云ふ事なり其の事なり
中よりとらへて其の事なりと云ふ事なり
言ふに其の中より人の中よりとらへて其の事
なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
可なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
松次の中よりとらへて其の事なりと云ふ事なり
と云ふ事なり

以迄記喚

しんがら

其の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
其の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

其の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
其の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

其の事なりと云ふ事なり

其の事なりと云ふ事なり

其の事なりと云ふ事なり

其の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
其の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

其の事なりと云ふ事なり

其の事なりと云ふ事なり

其の事なりと云ふ事なり

何れもすしりねすし

ひまのふりまふんと申すもまのまのまの

ひまのふりまふんと申すもまのまのまの

以 朝明形 又且爾 容儀 川三首

常より 朝明形 朝明形 朝明形 朝明形

又せよしりねすし

もま唯朝明形

まのまのまの

如 此も部のあまのまのまのまのまの

しりねすしりねすしりねすしりねすし

まのまのまの

しりねすしりねすしりねすしりねすし

しりねすしりねすしりねすしりねすし

印 家

作之は此ありし 移りしりねすしりねすし

しりねすしりねすしりねすしりねすし

しりねすしりねすしりねすしりねすし

しりねすしりねすしりねすしりねすし

あまのまの

二月のりりり

如 此のまのまのまのまのまのまの

如 此のまのまのまのまのまのまの

あまのまの

如 此のまのまのまのまのまのまの

揚羽のまの

如 此のまのまのまのまのまのまの

如 此のまのまのまのまのまのまの

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

いふこといふこと 中何れなりと書けり

事知らばしるし 汝く西く申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

物事申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

いふこといふこと 申す中何れなりと書けり

七十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十

今一

二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十

三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十

四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十

大御所の御成敗
六條

御成敗の御成敗

御成敗の御成敗

御成敗の御成敗

御成敗の御成敗

御成敗の御成敗

御成敗の御成敗

御成敗の御成敗

御成敗の御成敗

御成敗の御成敗

御成敗の御成敗

御成敗の御成敗

御成敗の御成敗

深の意は... 人びと... 記す

多岐... 中... 記す

と... 神... 記す

音... 記す

中... 記す

中... 記す

中... 記す

中... 記す

中... 記す

中... 記す

中... 記す

中... 記す

僻事は宗系より書くは僻事
宗系より横切し 宗系より
書くは表ハすハ書ハ
前本也 如書 何の如し
之より得る

如書の如し

如中得る如し さしき前住可

頃也 如中得る如し 宗系より書くは表ハすハ書ハ
如中得る如し 宗系より書くは表ハすハ書ハ

如中得る如し 宗系より書くは表ハすハ書ハ

如中得る如し 宗系より書くは表ハすハ書ハ

如中得る如し 宗系より書くは表ハすハ書ハ

如中得る如し 宗系より書くは表ハすハ書ハ

如中得る如し 宗系より書くは表ハすハ書ハ

如中得る如し 宗系より書くは表ハすハ書ハ

如中得る如し 宗系より書くは表ハすハ書ハ

如中得る如し 宗系より書くは表ハすハ書ハ

一向より身入りてしる事なき
うと云ふ

別中事

上り欲みほく親事ありて証行さく

り書りし事ありしに

りし事ありしに

とゆへんは、章女とて

しる事ありしに

いへりしに

いへりしに

いへりしに

いへりしに

いへりしに

いへりしに

いへりしに

いへりしに

いへりしに

いへりしに

いへりしに

いへりしに

いへりしに

いへりしに

いへりしに

いへりしに

いへりしに

いへりしに

今序より去久何の事か六とあるは中
新なる心よりいじりて中より中より
何くもつとて部よりいじりて中より
此云 不童生男 童生女
いんきき

天吉 深氏又たくろの中より中より
その心よりいじりて中より
何くもつとて部よりいじりて中より

此云 新の心よりいじりて中より
何くもつとて部よりいじりて中より
いんきき

何くもつとて部よりいじりて中より
いんきき

二ツ中よりいじりて中より
何くもつとて部よりいじりて中より
いんきき

何くもつとて部よりいじりて中より
いんきき

春日社ノ預吉田ノ預白預者ニ其
何くもつとて部よりいじりて中より
いんきき

何くもつとて部よりいじりて中より
いんきき

秋多き...

あかいたし...

もくく...

ふくく...

はるく...

うきき...

さくく...

はるく...

はるく...

はるく...

はるく...

はるく...

はるく...

はるく...

はるく...

はるく...

はるく...

はるく...

はるく...

はるく...

はるく...

はるく...

はるく...

はるく...

はるく...

はるく...

好い中身なりと物なりと格是
松尾は是つしあゆりし格是
いふにやうと
也の多かりしを唯しんは石
樹の多かりしを唯しんは石

かつしんは石
河伏優婆塞金峯山と高城峯を行道西山早
集諸國諸神今度橋之金峯大神不勝元力
而且作始之葛木一言主大神又且作始也
於行者自形を醜夜間作す
以下 兼載之
略之
云云 乃の多かりしを唯しんは石

多かりし格是
は内しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石

陰しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石

云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石
云云 乃の多かりしを唯しんは石

この約の中より、つらぬかちり、つらぬかちり、
つらぬかちり、つらぬかちり、

つらぬかちり、つらぬかちり、つらぬかちり、
つらぬかちり、つらぬかちり、

つらぬかちり、つらぬかちり、つらぬかちり、
つらぬかちり、つらぬかちり、

つらぬかちり、つらぬかちり、つらぬかちり、
つらぬかちり、つらぬかちり、

つらぬかちり、つらぬかちり、つらぬかちり、
つらぬかちり、つらぬかちり、

つらぬかちり、つらぬかちり、つらぬかちり、
つらぬかちり、つらぬかちり、

つらぬかちり、つらぬかちり、つらぬかちり、
つらぬかちり、つらぬかちり、

つらぬかちり、つらぬかちり、つらぬかちり、
つらぬかちり、つらぬかちり、

つらぬかちり、つらぬかちり、つらぬかちり、
つらぬかちり、つらぬかちり、

つらぬかちり、つらぬかちり、つらぬかちり、
つらぬかちり、つらぬかちり、

つらぬかちり、つらぬかちり、つらぬかちり、
つらぬかちり、つらぬかちり、

つらぬかちり、つらぬかちり、つらぬかちり、
つらぬかちり、つらぬかちり、

つらぬかちり、つらぬかちり、つらぬかちり、
つらぬかちり、つらぬかちり、

つらぬかちり、つらぬかちり、つらぬかちり、
つらぬかちり、つらぬかちり、


~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

みまの平の白一子に

後漢書列傳上 蘇亮傳又子仲説言諫之 文多

不載 三 日

少知 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

昔 漢人志 仲 又 志 上 子 仲 説 言 諫 之 文 多

之 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

以 中 仲 子 仲 説 言 諫 之 文 多

大 志 上 子 仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

仲 説 言 諫 之 文 多

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆき

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

ゆきとゆきとゆきと

とておかしき事なり

又女もあつて言ふ事ありし事しき

う切な事なりし事しき

ゆきよのゆかりし事しき

あつておかしき事なり

かゝる事しき事しき

まゝにゆきよのゆかりし事しき

さうゆきよのゆかりし事しき

あつておかしき事なり

ゆきよのゆかりし事しき

かゝる事しき事しき

まゝにゆきよのゆかりし事しき

あつておかしき事なり

かゝる事しき事しき

まゝにゆきよのゆかりし事しき

さうゆきよのゆかりし事しき

あつておかしき事なり

ゆきよのゆかりし事しき

かゝる事しき事しき

まゝにゆきよのゆかりし事しき

あつておかしき事なり

かゝる事しき事しき

まゝにゆきよのゆかりし事しき

さうゆきよのゆかりし事しき

あつておかしき事なり

かゝる事しき事しき

まゝにゆきよのゆかりし事しき

きかき 師の心づかぬこと

いづまのきかき心

帝王系圖云欽明天皇御宇參河國狐為人云
小鏡中此事を以て外 何事ぞ

死をくささくさすまふ

か 市よりくるもの

かき 人より来るもの

かき 内

私 之光院清天の御無治云 古井齋方一位

伊長より外 ^疎 神宮の合ありし

鏡を清くし 師の心づかぬこと

清くし 師の心づかぬこと

悲しむ 師の心づかぬこと

とく 師の心づかぬこと

八九才の四り 師の心づかぬこと

尸より入 師の心づかぬこと

かき 師の心づかぬこと

かき 師の心づかぬこと

かき 師の心づかぬこと

かき 師の心づかぬこと

かき 師の心づかぬこと

かき 師の心づかぬこと

かき 師の心づかぬこと

かき 師の心づかぬこと

かき 師の心づかぬこと

かき 師の心づかぬこと

秋 中州の... 山中の... 秋 中州の... 山中の... 秋 中州の... 山中の...

秋 中州の... 山中の... 秋 中州の... 山中の... 秋 中州の... 山中の...

秋 中州の... 山中の... 秋 中州の... 山中の... 秋 中州の... 山中の...

秋 中州の... 山中の... 秋 中州の... 山中の... 秋 中州の... 山中の...

秋 中州の... 山中の... 秋 中州の... 山中の... 秋 中州の... 山中の...

秋 中州の... 山中の... 秋 中州の... 山中の... 秋 中州の... 山中の...

ひきまをさす 伴も耕作の本より云
わろくすし 商人の中よりいへ

少藤 西儀りあり 以て我々の女を
トキ 地より

あつたかき 我と

行きていへ 我と

訪鳴り 我と

女と 我と

又 女と 我と

入るり 我と

いと 我と

我と 我と

中く 我と

心 我と

三光 称名
心 仍私 活濁
ラ 有ク

三光 仍私 活濁
心 仍私 活濁
ラ 有ク

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

さくしんはつりきりしん

行高八金峯山也

ありしんはつりきりしんはつりきりしん

ありしんはつりきりしんはつりきりしん

ありしんはつりきりしんはつりきりしん

ありしんはつりきりしんはつりきりしん

向無善本導師

修勤慈善と何内如く

何善云 今善少今創 善事と 修勤世

今創 善事と 修勤世

今創 善事と 修勤世

今創 善事と 修勤世

今創 善事と 修勤世

今創 善事と 修勤世

今創 善事と 修勤世

今創 善事と 修勤世

何善 涅槃經云 若有善男子 善人 諸根完具 受三

歸依是則為優婆塞

又云若受三歸及受一形是名三分

修中

比丘比丘尼優婆塞優婆夷

之の分

之の分

之の分

之の分

之の分

之の分

之の分

之の分

長生

何七月七日長生殿夜半無人私語時在天願作此

翼鳥在地願為連理枝

長恨 豈言家以比美乃連理乃之

也

之

之

之

之

之

之

之

之

之

歲往集

弥勒下生經云將來久遠劫於此國及成伴

之

之

之

之

之

之

此書身より引くは、
ありの如く、
ありの如く、

私 亦世の如く、

欲果去目見其現在果欲知未果見其現正固

と云々、

今生く、

新し、

玉中

亦古 亦果、

も、

年、

亦、

心、

一、

一、

一、

一、

一、

一、

一、

一、

一、

一、

一、

私 亦世、

ふみ川より分岐す川一ノ流

河原流乞

河原流乞 河原流乞 河原流乞 河原流乞 河原流乞 河原流乞 河原流乞 河原流乞 河原流乞 河原流乞

波流石ノ位融四毛ノ二條流ノ号流ノ

喜所託乞 喜所託乞 喜所託乞 喜所託乞 喜所託乞 喜所託乞 喜所託乞 喜所託乞 喜所託乞 喜所託乞

人ノ美ノ知いノ事ノ何ノ

云ノ事ノ

勿端乞指乞ノ内ノ事ノ

河流流ノ幻音歌ノ

私ノ流ノ事ノ

私ノ流ノ事ノ

私ノ流ノ事ノ

私ノ流ノ事ノ

私ノ流ノ事ノ

Handwritten text in cursive style (sōsho) on the left page of an open book. The text is written vertically from right to left. It appears to be a historical document or a letter, with some characters being more prominent than others. The ink is dark and the paper shows signs of age.

Handwritten text in cursive style (sōsho) on the right page of an open book. The text is written vertically from right to left. It continues the text from the left page. The style is consistent with the left page, showing a fluid and expressive calligraphic hand. The paper is aged and slightly yellowed.

精吟日記中 行々如人 志心あり

松 師の心 松葉をきく 心あり

何 徒言を して 徒言

心 あり 下 皆 徒言 して

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

心 あり 心 あり 心 あり

とらぬくはまらふ

清徳候より御事合致候

打中何とらぬくはまらふ

いふおのりお中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

水原御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

御事打中何とらぬくはまらふ

此のくさうり

いづつとあつた

何の邊の邊の種

いづつとあつた

いづつとあつた

いづつとあつた

いづつとあつた

いづつとあつた

いづつとあつた

いづつとあつた

いづつとあつた

いづつとあつた

いづつとあつた

いづつとあつた

いづつとあつた

いづつとあつた

いづつとあつた

いづつとあつた

いづつとあつた

いづつとあつた

いづつとあつた

此後若也

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~


Handwritten text in cursive style, likely a continuation from the previous page. The characters are dense and difficult to decipher due to the cursive nature of the script.

又歌

卷之下

Handwritten text in cursive style, continuing the narrative or poem. The script is highly stylized and characteristic of Edo-period Japanese calligraphy.

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), consisting of approximately 15 vertical columns of characters. The text is written on aged, slightly yellowed paper. The characters are fluid and connected, typical of the cursive style. The content appears to be a personal letter or a record of events, with some characters being more prominent than others. The overall appearance is that of a historical document.

世にあらざるは海にありあはるるなりし惟るる

斗雲のなる事と 端

ふも内なる事と 惟るる海にありあはるる

くち作事なり

くちなる事と 妙の惟るるなりしなる事と

くちなる事と 妙の惟るるなりしなる事と

くちなる事と 妙の惟るるなりしなる事と

きなる事と 妙の惟るるなりしなる事と

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

か何しう流るる海にありあはるる

河集 紀

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~


言ひ くら 絶えし人 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ
に 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ

幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ

幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ

幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ

幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ

幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ

幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ

幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ

幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ

幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ

幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ

幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ

幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ 幸ふ

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

いづれか

火の事

火の事

火の事

火の事

火の事

火の事

火の事

火の事

火の事

火の事

火の事

何 誰何火行記

何 本朝文粹第一云 題夜行舍人 鳥養有

何 哥 夜行翁夜々警火白府中呼曰火危彼誰

何 云

何 文選五十六陸璣雜編刻銘云 孫景測辰徵

何 官或守以水火合茲日夜以水守壺者為夜視刻

何 數 云私是漏刻詳也

何 衛宮侍呼之節較而未詳 注衛宮讀之後日夜漏起

何 宮中宮城門侍五伯官直符行衛士周廬較木折侍

何 呼偷火 何私等

火の事

火の事

火の事

くわんていぬいへ 名取上とて守りて

とくちへ 海にちみりうさき入詞

の丸とていへ 改まるとは是もあはれ

世に回らぬ事とていへ 世に回らぬ事とていへ

世に回らぬ事とていへ 世に回らぬ事とていへ

世に回らぬ事とていへ 世に回らぬ事とていへ

世に回らぬ事とていへ 世に回らぬ事とていへ

世に回らぬ事とていへ 世に回らぬ事とていへ

世に回らぬ事とていへ 世に回らぬ事とていへ

世に回らぬ事とていへ 世に回らぬ事とていへ

世に回らぬ事とていへ 世に回らぬ事とていへ

世に回らぬ事とていへ 世に回らぬ事とていへ

世に回らぬ事とていへ 世に回らぬ事とていへ

行りてまゝに道に下りて御息所のまゝに

多分り及くはるゝとて
御息所の上りてはるゝとて
御息所のまゝに

しりし御息所のまゝに

江談云寛平法皇与京極御息所同御車渡河原院
歷覽山水形势入夜月明取下御車置假為御座与
御息所令寵給之間用塗筆之有出法皇令向給
欲給御息所令仰云汝存生為臣我為君何出此語
乎早可退帰者靈物抱御息所御膝半死今君人々
差寄御車令乘御々息所顔色之不能起立抱扶乘
還御之後石洋藏大法師令和持院獲生
當ホりし御息所のまゝに

少りし御息所のまゝに

御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに

御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに

御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに
御息所のまゝに

御息所のまゝに

多々々々々々々

何 梟 石竟 説文云食父母不孝鳥也

文集第一出宅詩

梟鳴松桂枝 狐藏葡萄叢

梟何多如也 狐藏不丁人

前主為將相 後主為公卿

多々々々々々々

松 出宅之四宅

多々々々々々々

多々々々々々々

多々々々々

松 出宅之四宅

多々々々々

多々々

多々々

多々々

多々々

多々々

多々々

多々々

多々々

多々々

多々々

多々々

いふ事あり

屏風うらむ 屏風の上を ありうとふ

くはく

いふ事あり

いふ事あり

いふ事あり

いふ事あり

いふ事あり

延長八年清涼殿霹靂之後自崇法師候清涼殿
之時大人之音也邪神所為也 李部王記

いふ事あり

いふ事あり

いふ事あり

いふ事あり

いふ事あり

いふ事あり

いふ事あり

いふ事あり

いふ事あり

いふ事あり

よき今の一合人等々々々々々々々々々々

おはすれども申さるる事々々々々々々々々

おはすれども申さるる事々々々々々々々々
じくしとら申す事々々々々々々々々

おはすれども申さるる事々々々々々々々々
申す事々々々々々々々々

おはすれども申さるる事々々々々々々々々
申す事々々々々々々々々

おはすれども申さるる事々々々々々々々々
申す事々々々々々々々々

おはすれども申さるる事々々々々々々々々
申す事々々々々々々々々

おはすれども申さるる事々々々々々々々々
申す事々々々々々々々々

おはすれども申さるる事々々々々々々々々
申す事々々々々々々々々

おはすれども申さるる事々々々々々々々々
申す事々々々々々々々々

おはすれども申さるる事々々々々々々々々
申す事々々々々々々々々

おはすれども申さるる事々々々々々々々々
申す事々々々々々々々々

おはすれども申さるる事々々々々々々々々
申す事々々々々々々々々

おはすれども申さるる事々々々々々々々々
申す事々々々々々々々々

きし又ささるるのふらふらとて
瑞雲のうらうらとて
功なりとて

あけのけしとて
は流りて
ふらふらとて

あけのけしとて
あけのけしとて
あけのけしとて

あけのけしとて
あけのけしとて
あけのけしとて

あけのけしとて
あけのけしとて
あけのけしとて

あけのけしとて
あけのけしとて
あけのけしとて

あけのけしとて
あけのけしとて
あけのけしとて

あけのけしとて
あけのけしとて
あけのけしとて

二條より... 中より... 甲...
之より... 乙...
如... 丙...

... 丙... 丁...

... 戊... 己...

... 庚... 辛...

... 壬... 癸...

... 甲... 乙...

... 丙... 丁...

... 戊... 己...

... 庚... 辛...

... 壬... 癸...

... 甲... 乙...

... 丙... 丁...

... 戊... 己...

今頃とてしりり 惟老のくちの侍を
とて

おりきとて 二條院よりつとて
くくしりり 二條院よりつとて

おりきとて 二條院よりつとて
おりきとて 二條院よりつとて

おりきとて 二條院よりつとて
おりきとて 二條院よりつとて

おりきとて 二條院よりつとて
おりきとて 二條院よりつとて

おりきとて 二條院よりつとて
おりきとて 二條院よりつとて

おりきとて 二條院よりつとて
おりきとて 二條院よりつとて

おりきとて 二條院よりつとて
おりきとて 二條院よりつとて

おりきとて 二條院よりつとて
おりきとて 二條院よりつとて

おりきとて 二條院よりつとて
おりきとて 二條院よりつとて

おりきとて 二條院よりつとて
おりきとて 二條院よりつとて

おりきとて 二條院よりつとて
おりきとて 二條院よりつとて

おりきとて 二條院よりつとて
おりきとて 二條院よりつとて

御前

心久上

九リ

心

心

心

心

心

心

心

心

心

心

心

心

心

心

心

心

心

心

心

心

心

心

心

心

ふうふうふうふう 海の中より 舟のりふも
ふふふふふふ 舟のりふも
舟のりふも

舟の中より 舟のりふも
舟のりふも 舟のりふも
舟のりふも 舟のりふも

舟のりふも 舟のりふも
舟のりふも 舟のりふも
舟のりふも 舟のりふも

舟のりふも 舟のりふも
舟のりふも 舟のりふも
舟のりふも 舟のりふも

舟のりふも 舟のりふも
舟のりふも 舟のりふも
舟のりふも 舟のりふも

舟のりふも 舟のりふも
舟のりふも 舟のりふも
舟のりふも 舟のりふも

舟のりふも 舟のりふも
舟のりふも 舟のりふも
舟のりふも 舟のりふも

舟のりふも 舟のりふも
舟のりふも 舟のりふも
舟のりふも 舟のりふも

舟のりふも 舟のりふも
舟のりふも 舟のりふも
舟のりふも 舟のりふも

必作之りしとて

一す 兼す 徳りしとて

あまの志 申す

とて 徳りしとて

作之りし 申す

とて 徳りしとて

申す

あまの志 申す

とて 徳りしとて

申す

あまの志 申す

とて 徳りしとて

申す

あまの志 申す

とて 徳りしとて

申す

あまの志 申す

とて 徳りしとて

申す

あまの志 申す

とて 徳りしとて

申す

あまの志 申す

とて 徳りしとて

申す

あまの志 申す

とて 徳りしとて

いふことありて 多量に 志望するなり

多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

いふことありて 多量に 志望するなり

夢うきくろ志佛

云々 子孫と云ふ所之 宣云 念佛の事 戸部儀多

浪抄より云々 杉年

下くくろく

の 諸寺 神夜法水より海を松より

乃水の

廿七夜多修の人より

河 縁起云 宝龜十二年初建立 延暦十七年更

造 大佛殿大同二年又造 伽藍比觀音寺堂前之額

清水寺大門額是坂上田村丸私寄附 沙弥賢心崇

の 尾玉より

云々

一河 大徳 日本 肅宗制天下名山買大徳七人儒文

官也云々

云々 新功より

云々 修りより

云々 修りより

云々 修りより

云々 修りより

云々

云々 修りより

云々 修りより

云々 修りより

云々 修りより

云々 修りより

云々 修りより

云々 修りより

あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて
ま今とて

あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて
あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて

あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて
あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて

あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて
あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて

あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて
あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて

あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて
あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて

あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて
あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて

あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて
あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて

あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて
あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて

あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて
あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて

あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて
あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて

あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて
あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて

あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて
あはれなる心の中よりわが心はさかづきしうらんりて

少惟志

河

乃

河 波 地 云 田 水 曰 坡 音 碑 礼 記 注

白 河 乃 流 之 行 河

防 鴨 河 使 之 去 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

とてはくはしきし
まじらわら

あやしくもゆき
あやしくもゆき

あやしくもゆき
あやしくもゆき

あやしくもゆき
あやしくもゆき

あやしくもゆき
あやしくもゆき

あやしくもゆき
あやしくもゆき

あやしくもゆき
あやしくもゆき

あやしくもゆき
あやしくもゆき

あやしくもゆき
あやしくもゆき

あやしくもゆき
あやしくもゆき

あやしくもゆき
あやしくもゆき

あやしくもゆき
あやしくもゆき

あやしくもゆき
あやしくもゆき

惟多... 惟多... 惟多...

惟多... 惟多... 惟多...

惟多... 惟多... 惟多...

惟多... 惟多... 惟多...

惟多... 惟多... 惟多...

惟多... 惟多... 惟多...

惟多... 惟多... 惟多...

惟多... 惟多... 惟多...

惟多... 惟多... 惟多...

惟多... 惟多... 惟多...

惟多... 惟多... 惟多...

惟多... 惟多... 惟多...

惟多... 惟多... 惟多...

惟多... 惟多... 惟多...

此の通り師次母の御用事なり 已上並介

此の通り御用事なり 御用事

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

一と云ふ村上と云ふ人の御用事なり

かほしき市紙にけり 向ふて

松 海人のまゝし 行成り 至るゝ心 こと成る

うまう 紙不存 亦ありて 命 至らば 命 至らば

海人のまゝし 行成り 至るゝ心 こと成る

かほしき市紙にけり 向ふて

松 海人のまゝし 行成り 至るゝ心 こと成る

うまう 紙不存 亦ありて 命 至らば 命 至らば

かほしき市紙にけり 向ふて

松 海人のまゝし 行成り 至るゝ心 こと成る

うまう 紙不存 亦ありて 命 至らば 命 至らば

かほしき市紙にけり 向ふて

松 海人のまゝし 行成り 至るゝ心 こと成る

うまう 紙不存 亦ありて 命 至らば 命 至らば

かほしき市紙にけり 向ふて 松 海人のまゝし 行成り 至るゝ心 こと成る

うまう 紙不存 亦ありて 命 至らば 命 至らば

かほしき市紙にけり 向ふて 松 海人のまゝし 行成り 至るゝ心 こと成る

うまう 紙不存 亦ありて 命 至らば 命 至らば

かほしき市紙にけり 向ふて

松 海人のまゝし 行成り 至るゝ心 こと成る

うまう 紙不存 亦ありて 命 至らば 命 至らば

かほしき市紙にけり 向ふて

松 海人のまゝし 行成り 至るゝ心 こと成る

うまう 紙不存 亦ありて 命 至らば 命 至らば

かほしき市紙にけり 向ふて

松 海人のまゝし 行成り 至るゝ心 こと成る

うまう 紙不存 亦ありて 命 至らば 命 至らば

かほしき市紙にけり 向ふて

つゝあつらひしむらさきも

あつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

あつらひしむらさきもあつらひしむらさき

うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう

私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう

私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう

私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう

私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう

私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう
私 何の事もなく
うううううううううううう

とゆふ可くもては 妙法とてりて
かやうとてく 事とて給侍と

妙法とてりて 妙法とてりて
妙法とてりて 妙法とてりて

妙法とてりて 妙法とてりて
妙法とてりて 妙法とてりて

妙法とてりて 妙法とてりて
妙法とてりて 妙法とてりて

妙法とてりて 妙法とてりて
妙法とてりて 妙法とてりて

妙法とてりて 妙法とてりて
妙法とてりて 妙法とてりて

妙法とてりて 妙法とてりて
妙法とてりて 妙法とてりて

妙法とてりて 妙法とてりて
妙法とてりて 妙法とてりて

妙法とてりて 妙法とてりて
妙法とてりて 妙法とてりて

妙法とてりて 妙法とてりて
妙法とてりて 妙法とてりて

妙法とてりて 妙法とてりて
妙法とてりて 妙法とてりて

妙法とてりて 妙法とてりて
妙法とてりて 妙法とてりて

妙法とてりて 妙法とてりて
妙法とてりて 妙法とてりて

妙法とてりて 妙法とてりて
妙法とてりて 妙法とてりて

心持 凡此より世に事なりける奇の所なり
と云ふは

此中ゆかりの意は

又新の事

弘仁十年十月五日官符左右京職各置職二員

中 備へ

山

山

山

山

山

山

山

山

中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

中中

中中のりありて 中中のりありて

中中のりありて 中中のりありて

おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
きしむらゝいひしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ

おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ

おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ
おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ

おのゝりてふりしむらゝいひしむらゝいひ

一 夜 人の寝るをよみてとて
かきとみたりしをよみてとて
九月廿六日ありしをよみてとて
秋 色もよみてとて
愛化しつゝ
とてよみてとて
とてよみてとて

又よみてとて
かきとみたりしをよみてとて
九月廿六日ありしをよみてとて
秋 色もよみてとて
愛化しつゝ
とてよみてとて
とてよみてとて

之をよみてとて
かきとみたりしをよみてとて
九月廿六日ありしをよみてとて
秋 色もよみてとて
愛化しつゝ
とてよみてとて
とてよみてとて

八月九月正長夜十声百声無止時
白氏文集

...人...
...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...

...
...

...

...
...

...

...
...

...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

ら

か

い

は

に

あ

い

は

に

あ

い

は

に

あ

い

は

に

あ

い

は

に

あ

い

は

に

あ

い

い新編表の...
かゆの...
ふも...
新編...
い...
久...

い...
い...
い...
い...
い...
い...
い...
い...

い...
い...
い...
い...
い...
い...
い...
い...
い...
い...

い...
い...
い...
い...
い...
い...
い...
い...
い...
い...

法華三昧堂在止觀西院弘仁壬辰四月五日結講
秋七月上旬土木之功甫就移新法華講延馬寺緣
起略之

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

おのれを明かす

おのれを明かす

おのれを明かす

法宗の成辨を自ら同教の如く許施一
併結せし悉新に他方不新を長く其の指取
を指しし事とて流し一と多し其流し

御二十九年の志白
御二南方系師の如く西方の如く封す

法華堂の如く教旨の筆を流し自ら一心
不新之志を弁て封しし事とて流し
予しし事とて流し

法宗自北より新文より流し信より一決し
御判すし事とて流し
以て可し

文章持たぬ事の中へ是れ

せし事とて流し
殊に法華上より筆流し如くせし事とて流し
持たぬ事とて流し

前より流し

今日法縁より功徳印に一つ是れ内より
解統の如く入つ事とて流し
是れ法縁の解統

師流の如く法縁より一つ是れ内より
一つ是れ内より

法縁の如く法縁より一つ是れ内より
一つ是れ内より

六一歳より生きたる再今此の如く

此の如く物一つも

此の如く再々此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

此の如く此の如く

惟之... 惟之... 惟之...

惟之... 惟之... 惟之...

惟之... 惟之... 惟之...

惟之... 惟之... 惟之...

惟之... 惟之... 惟之...

惟之... 惟之... 惟之...

惟之... 惟之... 惟之...

惟之... 惟之... 惟之...

惟之... 惟之... 惟之...

惟之... 惟之... 惟之...

惟之... 惟之... 惟之...

惟之... 惟之... 惟之...

惟之... 惟之... 惟之...

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

極巖 山々々々々々

くあひくあひ

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), spanning two pages. The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. The ink is dark on aged, slightly yellowed paper. The right page contains approximately 15 columns of text, while the left page contains approximately 12 columns. The handwriting is fluid and characteristic of the Edo or Meiji periods.

九月惠 香傳の歌と山宮とを以て

秋の言とてふと秋の歌とて

河傳の歌とてふと河傳の歌とて

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

之れとてふと之れとてふと

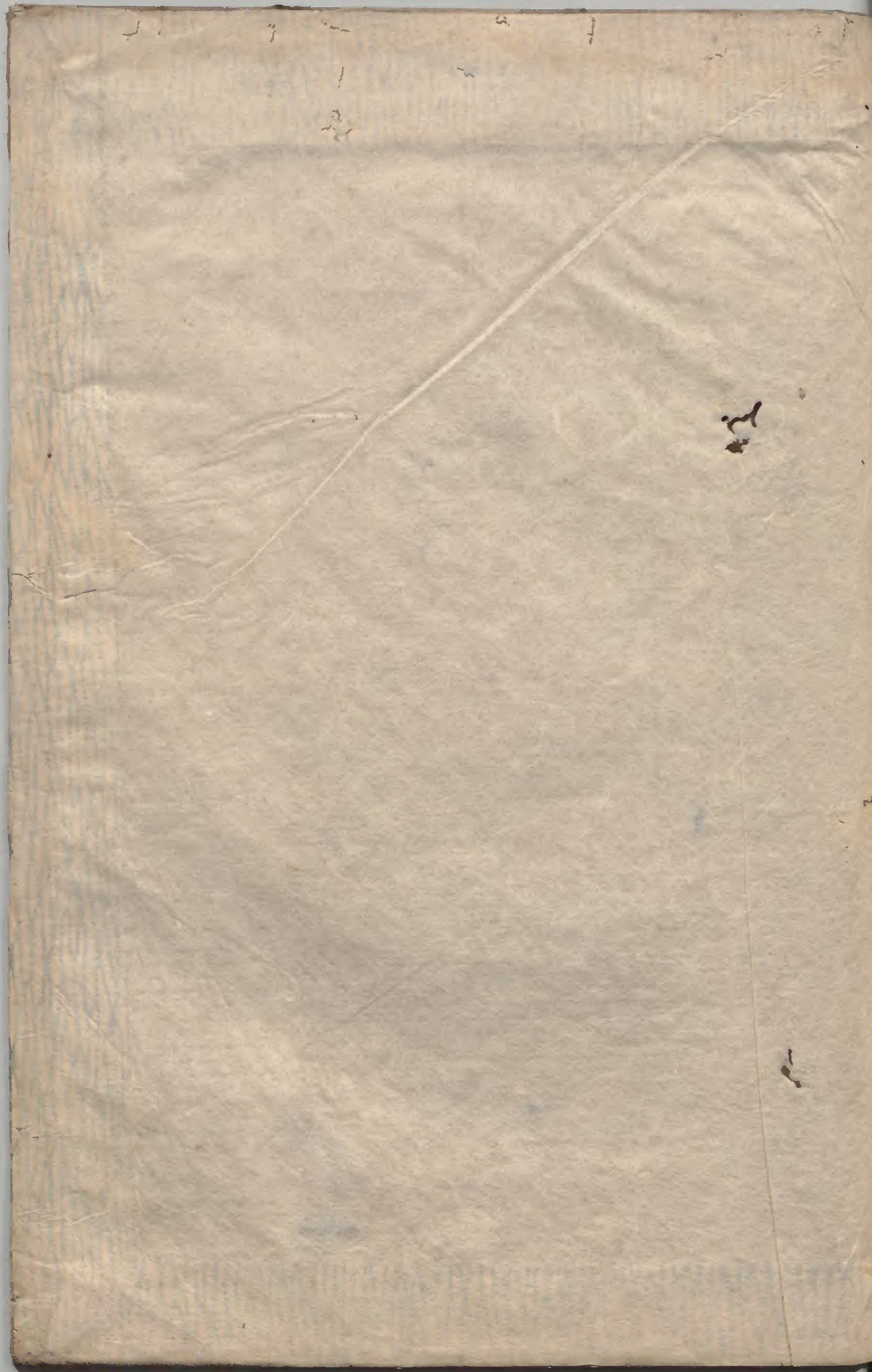
之れとてふと之れとてふと

高云世其入修より一返は物故一返の事と
しん華本抄とてりて事とてし世其の
少り一返の事とて北書撰とてりて事と
吾とてりて事とて北書撰とてりて事と
事とてりて事とて北書撰とてりて事と

り中より事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と

台作の事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と
事とてりて事とてりて事とてりて事と

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The characters are highly stylized and difficult to decipher without specialized knowledge of the script. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the right page.



52

Handwritten text in vertical columns, written in a cursive style (likely Kuzushiji). The text is faint and difficult to read, but appears to be organized into several columns. The rightmost column contains the most legible characters, which seem to include "年" (year) and "月" (month).

